

山本・吉井・津田：縁飾り、裾飾りのついた18世紀のドレス

縁飾り、裾飾りのついた18世紀のドレス

——複製による考察——

山 本 昌 子

吉 井 千 史

津 田 志由紀

18 th Century Dress with Hem and Train Decorations

— Studies from Reproduction —

Clothes reflect the social structure of the period and they have an especially close relationship with culture. Throughout history clothing styles have made many transitions. Of all the styles in the long history of the dress the 'robe à la française' is said to be the most exquisite and voluminous. This fashion flourished in France's 18th Century Court Culture, Rococo(1715-1789). It is very rare to see surviving dresses in perfect condition. This time, an original dress from around 1765 was chosen to be studied. There are three characteristic Rococo items which make up the dress-the robe, petticoat and stomacher and these were each remade to study the shape and physique of the woman, the sewing technique, and the wearing technique.

For the reproduction of this dress, the pattern shown in 'DRESSSTUDY' Spring 1988, Vol. 13, p.19, was used as a base.

The surface of the dress, with its extensive hem and train decorations, looks highly ornate and very beautiful. However, when we look at the underneath of the dress, it is sewn quite broadly. This may be due to the maker's tendency to concentrate only on what people can see and a tendency to neglect the parts which they cannot see. Alternatively, it may be that the maker wished to minimise the number of stitches for a specific purpose. This would allow easy re-making of the dress, which was often the case in this period. A further observation is the illusory effect of the dress when worn. The wearer's waist appears to be smaller and slimmer than the real measurements would suggest. Because a dress of this period could not be worn without a great deal of assistance it would seem that practicality and rationality in the wearing were not considered particularly important.

1 緒 言

服装はその時代の政治や経済の社会体制、特に文化とは密接な関係にあり、それらの歴史とともに多様な変遷を重ねてきた。

1715年、フランス王ルイ14世の死により、ルイ15世が幼少で即位、フィリップ・ドルレアン公が摂政となった。18世紀中ば、ルイ15世とその愛妾ポンパドール侯爵夫人のもとで爛熟したロココ文化の服飾は、優雅、繊細、華麗、装飾性において他の時代の追従を許すものではなかった。ルイ16世の王妃マリー・アントワネットはロココ後期の女王とも呼ばれ、自由奔放に着飾り、ファッションリーダーの名をほしいままにしたが、その頃にはすでに絶対であったフランス宮廷文化にも大きなひびが入り始めており、頹廢の影が漂うようになっていた。マリー・アントワネットの浪費は国民の怒りの的となり、やがて1789年の大革命により失墜した。18世紀に、花咲いた宮廷文化は華々しくもドラマティックな展開であった。

今回製作したドレスは、1765年頃に製作されたと思われる。ローブ、ペチコート、ストマツカーの3つのアイテムから成るドレス・ローブ・ア・ラ・フランセーズ (robe à la française) で、複製することにより、当時の女性の体型、体格、パターン、カッティング、縫製技術、着装などを考察する。

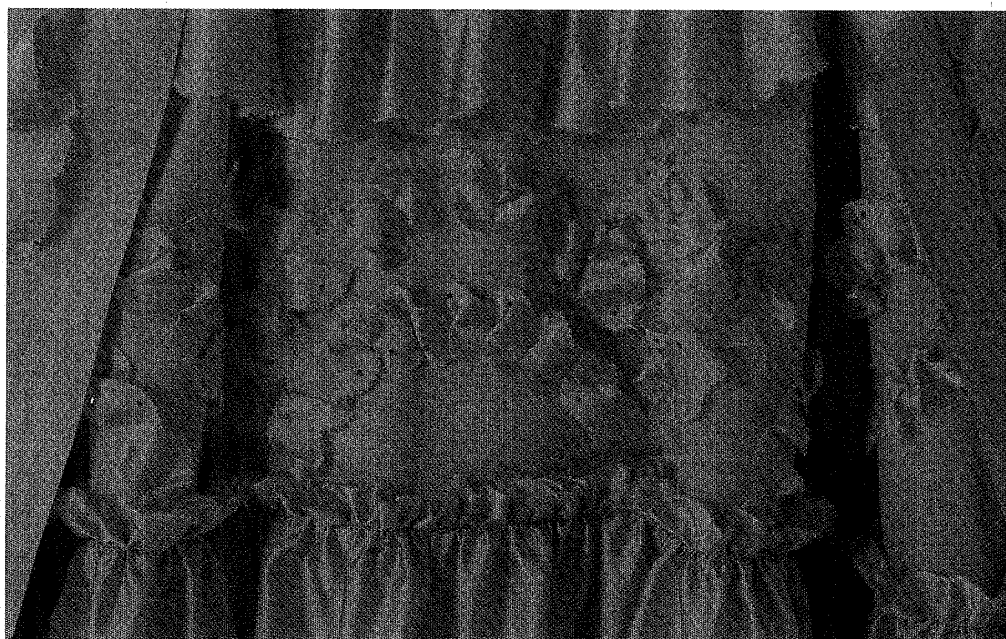
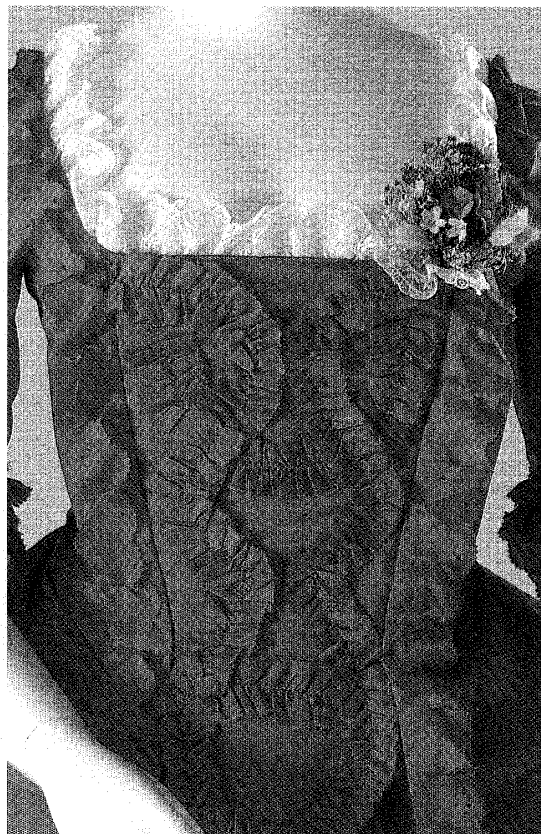
製作するにあたり、『DRESSTUDY』SPRING,1988,VOL 13, 京都服飾文化研究財団、19頁に掲載されたパターンを使用した。1989年4月4日～5月28日、京都国立近代美術館で開催された展覧会、「華麗な革命」での展示で実物を見聞し、素材、色彩、縫製において可能な限り忠実に、複製を試みたものである。

2 18世紀のフランス社会

18世紀のヨーロッパではイギリスの大きな台頭があるが、主に海外への発展と商業に力を注いでいた。イギリスの繊維産業は、飛び梭の発明、紡績機の発明、工場制大量生産を可能にするため、蒸気機関を動力として導入するなど、産業面では先進国であった。フランスはイギリスに対抗できる当時の大国ではあったが、繊維産業や大量生産という面では一歩後れをとっていた。そのイギリスの繊維産業等における生産上の“技術革新”に対してフランスは“文化”で対抗しようとした。このことが18世紀のフランスの文化発展の根本にあったと思われる。最初のフランスの文化の中心になるものが作られたのがルイ15世の後見をしたオルレアン公のレジャンヌ(摂政)時代といわれる。1つの例として、この時代に大流行したものに香水と毛皮があるが、当時でも非常に高価で贅沢な貴族趣味がフランス文化の根として張られていく。一方、1786年、英仏商業条約によってイギリス製の木綿が大量に流入するようになり、質素な木綿が贅沢な絹にかわって、流行の素材となった。贅沢な貴族趣味と対立するイギリス風の質素主義が並行して、生活に密着していたことも18世紀フランスの特徴の一つである。

山本・吉井・津田：縁飾り、裾飾りのついた 18 世紀のドレス





山本・吉井・津田：縁飾り、裾飾りのついた18世紀のドレス

18世紀に花開いたロ可可文化。ロ可可という名は貝殻などで飾った人工の岩窟を意味するフランス語のロカイユに起源するといわれる。ロ可可は18世紀のフランスを中心とする装飾美術様式の名称であったが、優雅で繊細で軽快な夢と遊びの文化として同時代の美的生活様式もロ可可の名で呼ばれるようになり隆盛をきわめる。このロ可可の文化を支えていたのは貴族と並んで、あるいはそれ以上に経済力を身につけたブルジョワジーであった。個人の生活を楽しむことが政治的威光を高めるより重要であったこの時代は、ロ可可は宮廷文化ではあったが、むしろ自由への情熱と経済繁栄に支えられたブルジョワジーのものであったかもしれない。

18世紀のヨーロッパは人間が自由に生きるのにもっとも好ましい時代であったとも云われる。当時のヨーロッパには権威を便宜的に解釈する自由さが残っており、経済は少しずつ発展して生活にゆとりをもたらし、科学は進歩し、新しい知識や情報が市民や農民階層にまで、たやすく伝達された。

また18世紀は女性の時代だとも云われる。この時代の女性は着飾って遊ぶばかりでなく、知的好奇心も高く、才気ある女性は多額の費用をかけてサロンを主催し、洗練された社交によって名をあげることも出来た。18世紀には多くの資産家の夫人たちによって開かれたサロンの歴史は古く中世にまでさかのぼるが、そこは、学芸の保護や時の政局を論ずる場であり、さまざまな情報交換の場でもあった。のちにフランス革命が思想的に準備されたのは女性が主宰していたサロンの中でもその啓蒙思想が育まれていた。

フランス革命において、「人は自由かつ権利において平等なものとして生まれ、生存する」との有名な人権宣言がうたわれた。しかし、実はこの宣言は人間の自由と平等を抽象的な理念として述べたままで、女性に対しては平等どころか権利を与えることさえなかった。フランス革命にも、パリコミュンにも、その後の歴史の重大な局面では、必らず闘う女性の姿があった。にもかかわらず革命期の憲法は女性を政治に参加する権利を持つ「市民」とはみなさなかった事実があるのも見逃せない。

3 ロ可可の服飾

ロ可可の服飾は大きく3つに時代区分される。

- 1) 摂政時代 (1715年～1730年)
- 2) ルイ15世時代 (ロ可可時代) (約1730年～1770年)
- 3) ルイ16世時代 (約1770年～1795年)

1) 摂政時代

ルイ14世の死によりルイ15世が幼くして即位したが、成年に達するまで、フィリップ・ドルレアン公が摂政となったので、摂政時代と呼ばれる。この時代のヨーロッパの婦人服飾は依然としてフランスを中心に展開していった。

摂政スタイル（ワトー・スタイル）と呼ばれる衣裳は17世紀のバロック様式（重厚で豪華なスタイル）とロココ様式（洗練された軽さ、装飾性）への過渡期のもので、バロックの固苦しさと儀式ばった感じは徐々に姿を消す。この時代の典型的な婦人の服装は、有名な画家、アントワーヌ・ワトーの絵の中に美しく描かれている。

前開きのサックガウンは控え目な装飾と単純な色彩でまとめられ、背面には大きな縦のボックス・プリーツがついており（ワート・プリーツの名がつけられている）、また身頃はゆったりとゆとりが多く、袖もプリーツのついた肘丈の広袖のルーズなシルエットではあるが、パニエの上に円錐形に広がった美しいラインが出ている。ヘアスタイルもなるべく小さく見せるように髪を簡単に後方に向けて撫でつけ、その上からフリルのついた平らなキャップをかぶっていた。しかし、このサックガウンはあまり長続きはしなかった。

装飾に平らなりボンで、そのテキスタイルに東洋の影響を受けた異国趣味“シノワズリー”が見られるのもこの時代の特徴である。

2) ルイ15世時代（ロココ時代）

ロココ式装飾趣味の発展は、多くの新しいモードをくり広げた。この時代の代表的な服装がローブ・ア・ラ・フランセーズといわれるもので、ローブ、ペチコート、ストマッカーの3つから成り立つ服装で着装するのにいちいちこれらをピンで留めたり、縫いつけたりしなくてはならない不合理なものであった。この服装にはパニエの復活が必然的にあげられる。パニエは17世紀の初頭には姿を消し、その後は時々ひそかに使用されていたこともあるが、まず最初にポケットパニエといわれるものが、この期に再び登場する。これはパニエの最上段の内側に二つのポケットがあり、このポケットの中にスカートの裾を引きこんでコスチュームの形作りをする。その後このパニエが左右に大きく張り出し、テーブルのような巨大なものもあった。形は前後には平らで両横に張り出し、歩くたびに大きく揺れ、真すぐ歩くにはかなり広いスペースを必要とした。横歩き、斜歩きなど必要にせまられてだけでなくエレガントに見せる工夫もされていた。ローブやペチコートのスカートの分量が大きくなると、そこにはたくさんの装飾がとりつけられ、衣裳を豪華に見せるために、ゴースやレースのフリル、フラウンス、リボン、ガーランド（花綵）、共布での飾りなど、華やかに飾りたてられた。ローブについているパゴダ袖にも特徴がある。パゴダは東南アジアの仏塔の形に似ていることからこの名がつけられた。この袖はタイトな半袖の袖口にアンガジャントという袖口飾りがついている。アンガジャントにはレースが多く使われていたが、当時のレースは非常に高価なもので、ドレスの生地代よりもはるかに高く、富と権力の象徴のような存在であった。なかでもアルジャンタンのレースやアランソンのレース（ニードルポイントレース）は最も高価なもので、これらはあまりに貴重すぎて一着の衣裳の全体や一部に使用されるのではなく、衿やカフス、縁飾り、裾飾りなどに部分的に使用され、ドレスを着用するときに応じて、取りはずしのきくように粗く縫いつけら

山本・吉井・津田：縁飾り、裾飾りのついた 18 世紀のドレス



写真 1



写真 2

れた。

ローブ・ア・ラ・フランセーズのもう一つのポイントはストマッカーである。ストマッカーはV字形に開いた胸当てとも胃押えとも云われるもので、多くの場合ローブの前端につけられている。これは三角のパネルの内側にボーンを入れて丈夫にさせたもので、最も人目を引く胸部をおおうため、衣裳全体の中で特に豪華で華やかに装飾された。

ルイ15世は多くの愛妾を持っていたが、その中でも特に有名なポンパドール夫人の（写真1 '87, アルテ・ピナコテーク（ミュンヘン）山本撮影）レースやリボン好きはよく知られており、この時代の衣裳はレースで装飾されてはじめて価値が認められた。ポンパドール夫人は身分は町民の出ではあったが、マナーや趣味の優美さ、高い教養と天性の才能に恵まれていたことがよく知られている。服飾に関してのセンスも非常によく、ロココファッションの典型を示すこの時代のファッションリーダーでもあった。このことから彼女の浪費過剰がフランス革命を招く一原因になったという人も少なくない。

3) ルイ16世時代

この期のファッションリーダーはロココの女王といわれるマリー・アントワネットである。（写真2 '87 シェーンブルン宮殿（ウィーン）山本撮影）フランス王政もこの頃になると翳りが見えはじめ、宮廷には頹廢の影が漂うようになる。万能であったフランス宮廷文化にも大きなひびが入りはじめていた。マリー・アントワネットはロココ崩壊期の女王と云うべきか。

ロココの盛期は1760年代で終り、その後フランス革命までの20年は古典主義との2本立になるが、マリー・アントワネットはその精神と服装の中に古典主義を受け入れながらもやはり後期ロココの典型で、身を飾ることに浮き身をやつしていた。歴史上最初ファッションデザイナーといわれるローズ・ベルタンを抱えて、この期の服装の世界は全くマリー・アントワネットの支配下にあったといえる。

最新流行の衣裳に身を包んでファッションの伝達を目的とするファッションドールが現われたのもこの時期であるが、この人形は18世紀末にモード誌が刊行されるとなると、その役目は終った。

マリーアントワネットがファッションリーダーになってからは婦人のドレスはシンプルなものへと変化したといわれるが、公式の場では依然としてローブ・ア・ラ・フランセーズが大きなパニエをつけて着用された。これは服装の歴史を通じて最も巨大で、最も華麗なものとして記憶されるが、その巨大なスカートをレースや花綵やリボンで装飾することはボンパドール夫人時代とは少しも変わらない。むしろより華々しく、大げさに飾られていた。またドレスの種類はボンパドール夫人時代に比べて多くなっていた。

一時期イギリス風のローブ・ア・ラングレーズ、シュミーズ・ア・ラングレーズなどが好まれたがこの傾向を引き起したのは、“自然に帰れ”のルソーの思想の影響があった。ポロネーズはウエストの後部と両サイドのアップースカートに大きなパフを持っているのが特徴である。また新しく登場したものにシュミーズ・ア・ラーレーヌがある。これはマリー・アントワネットがプチトリアノンで田舎風生活を楽しむために作らせた薄物のガウンであった。この18世紀で特筆すべきは巨大で過剰装飾のヘアースタイルである。かさ高い髪型に完成するには多くの材料と時間と労力が必要であったし、装飾もお遊び気分満点であった。日常の行動にすら思うにまかせず、一度結い上げたら二週間は持たせなくてはならなかった。頭部に虱がわくなど表面の華々しさと裏面の不潔さは奇妙なコントラストであった。

4 曲線的な縁かざり、裾かざりが施されたドレスの製作

製作にあたり、可能な限り実物に近い状態の複製を試みたが、以下の点につき、やむを得ず実物とは異なる点がある。

☆パターン

袖山のタック

三好氏の製図によると、袖山には3本のタックが示されているが、実物を見た限りではダーツがとられていると思われたため、今回の製作にあたっては、長さ9.5cmのダーツとした。

☆素 材

実物は52.5cm幅で23.2mの絹サテンが使用されたとあるが、今日ではこのような狭い巾のサテン地は少なく、92cm幅で13mのポリエステルサテンを使用した。

☆色 彩

資料ではストロベリー・ピンクとあるが、約220年を経た実物は、やけて色あせた部分もあり、同色のものを入手することは困難であったため、全体的な感じが似ているマンセル記号 7.5R 5/12(慣用色名 ^{エンタンイロ} 鉛丹色)の生地を使用した。

☆縫 製

①資料ではこのドレスは1765年頃イギリスで作られたものとある。最初のミシンと呼ばれるものは、1589年、イギリスで編物の針の動きからヒントを得て、1本の糸で編む鎖縫の機械が考案されミシンに関する研究の道が開かれ、1790年、最初の還縫ミシンが発明された。このドレスの製作はそれ以前のものであるから、精緻な手仕事と思われるが、本製作では縫い合せ部分はすべてミシン縫とした。

②飾り布

布端の始末は資料では“スカラップ形のピンキングに裁った”とあるが、はさみがどのようなものであったかは調査が困難であったため、本製作では細かい歯のピンキングばさみでスカラップ形にカットし、ところどころ鳩目穴でパンチングした。

③ボタンと紐

ローブのスカートを脇でたくしあげるためにつけられたものであるが、展示された実物で確認出来なかったため、ドレスと共布の直径1cmのくるみボタンと幅0.3cmの紐を作った。

1765年頃の曲線的な縁飾り・裾飾りの施されたドレス

“ローブ・ア・ラ・フランセーズ”

☆ デザイン

ローブ、ペチコート、ストマッカーの三つのアイテムから成り立ち、背には大きなボックス・プリーツ(ワトー・プリーツ)が入っているのを特徴とするドレス。共布で曲線的な縁飾りと裾飾りが施されている。

☆ 色 彩

7.5R 5/12 (慣用名 ^{エンタンイロ} 鉛丹色)

☆ 素 材

イ ドレス

○ ポリエステル・サテン 92cm幅—13m

うち、縁飾り布、裾飾り布は、3.5cm幅—10.03m、10cm幅—3.1m、13cm幅—2m、23.5cm幅—2.4m

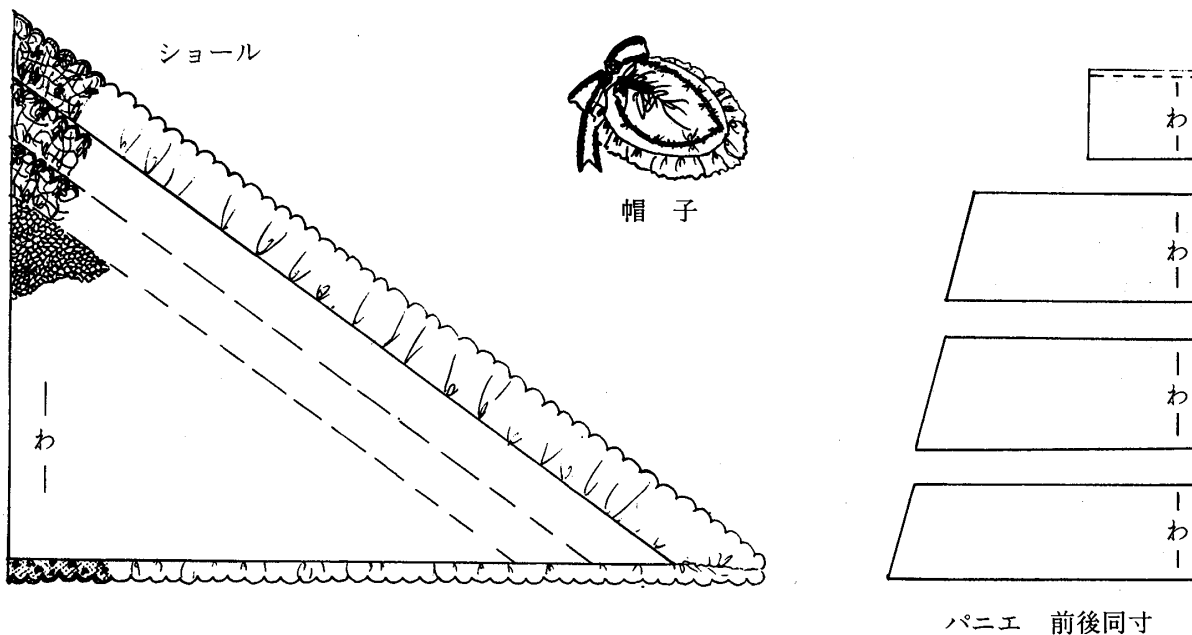
○ チュール・レース 90cm幅—0.7m

○ レース 3.5cm幅—3m

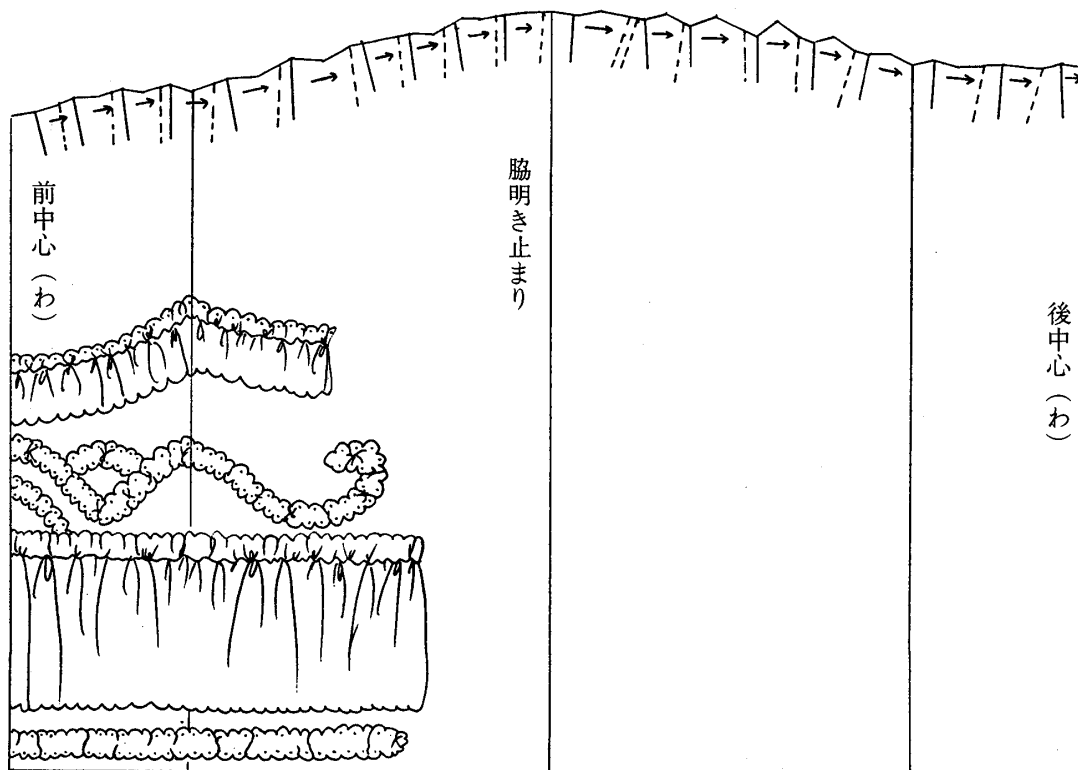
○ ストール

○ チュール・レース 90cm幅—1.5m

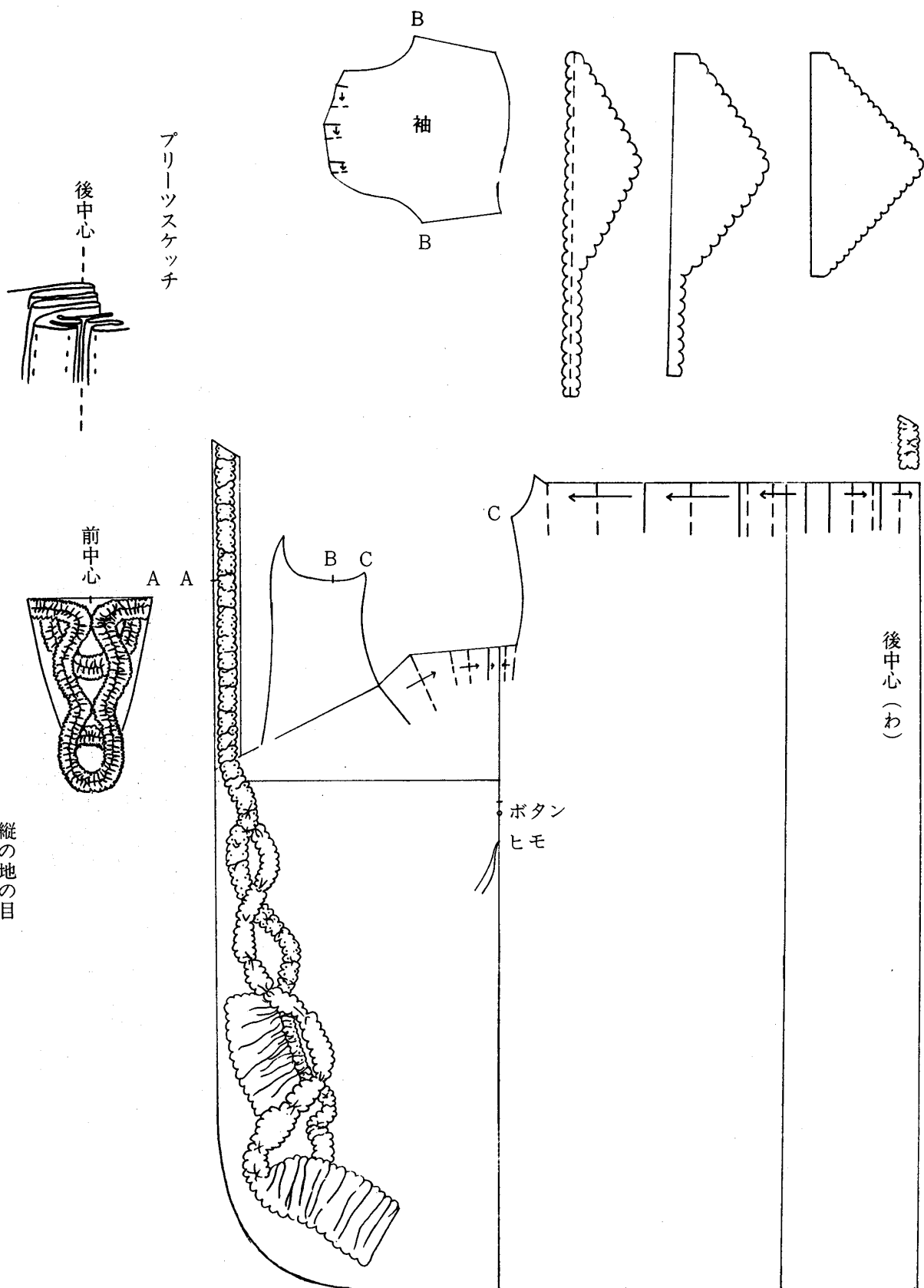
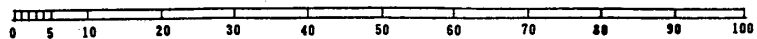
○ レース 3cm幅—2.5m、8cm幅—4.7m、9cm幅—2.8m



- ロープ、ペチコート、ストマッカーの三つのアイテムから成り立つ
- 布幅をいっばいに使った裁断
- プリーツとタックとでドレスを作り上げることが重要な技術となっている (作図：三好)



山本・吉井・津田：縁飾り、裾飾りのついた 18 世紀のドレス



☆ 裁 断

袖は横地で裁断する。(現在は縦地で裁断するのが普通である。)

☆ 縫 製

(1) ロープ

① 前身頃

- 前スカート部分とウエスト切替部分を縫い合せ、縫い代は1.5cmにして上へ倒す。
- ロープと共布の飾り布として、3.5cm幅—1m、10cm幅—1.1m、13cm幅—2mを用意し、それぞれギャザーやタックをとりながら所定の位置にとりどころ留めつける。
- この前スカートを前上身頃に縫いつけ、縫代は1.5cmにして上へ倒す。(写真カラー)

② 後身頃

- 後中心布と後脇布の縫い合せ。縫代は1.8cmにして脇側へ倒す。

- 後衿ぐりのプリーツをたたむ。

③ 前身頃と後身頃の縫合せ。

- 製図上のC点より脇止りまでと、脇明き止りから裾までを縫い合せ、縫代1.8cmにして前身頃側へ倒す。

- 脇のタックをたたむ。

④ 袖作り

- 袖下を縫い、縫代を1.5cmに切り、前袖の方へ倒す。
- アンガ・ジャント（袖口の飾り）は袖口寸法にギャザーをよせ、1段目と2段目の山の差は5cm、2段目と3段目（レース）との山の差は10cmとして、3段の飾り布の山の位置をそろえ、袖下縫い目線にそろえて縫いつける。(写真3)



写真3

⑤ 袖つけ

製図上の袖B点と身頃B点とを合わせ、袖を縫いつける。縫代は1cmにして身頃側へ倒す。

⑥ 前身頃から衿ぐりにかけての衿布。

山本・吉井・津田：縁飾り、裾飾りのついた 18 世紀のドレス

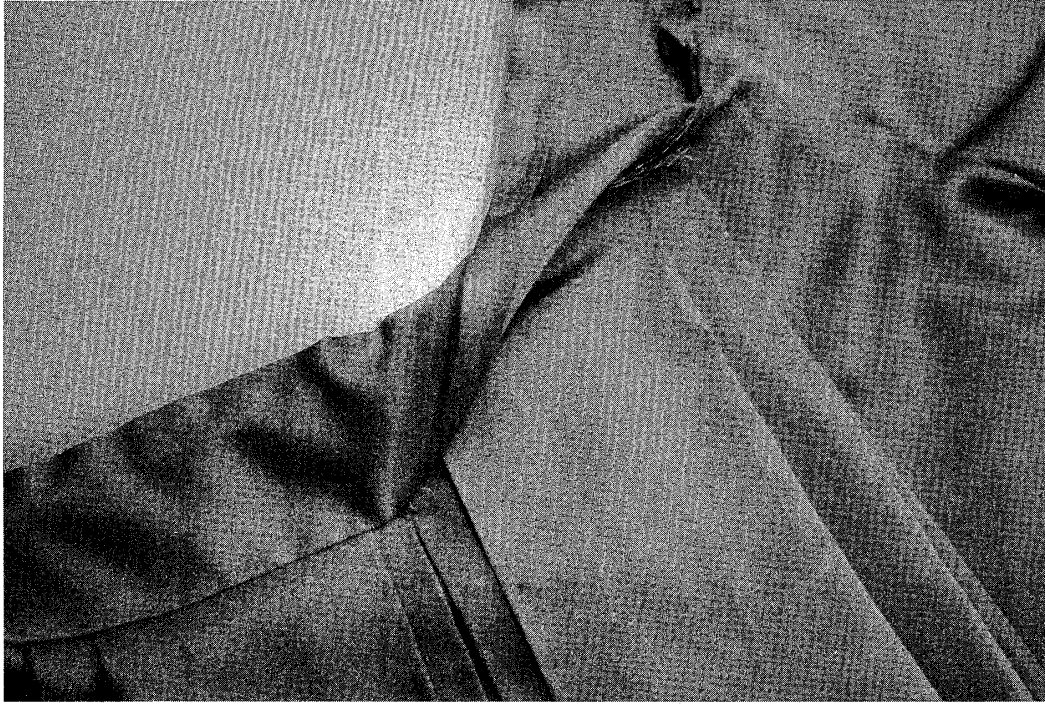


写真 4

- 衿布(4.5cm)とスカートウエストラインの前端より4.5cmを縫い合せ、縫代は上へ倒す。
- 衿布と身頃、袖山、後衿ぐりを表に合せて縫う。
- 袖山の前袖側ダーツより後衿ぐりにかけて、上り幅4.5cmになるよう衿布の端を折りこみ、くけつける。(写真4)
- 3.5cm幅の飾り布を2.88m用意し、衿布上にタックをとりながらとめつける。
- ⑦ くるみボタンと紐
 - ドレスと共布の直径1cmのくるみボタンを作る。
 - ドレスと共布の幅0.3cm、長さ22cmの紐を2本作る。
 - くるみボタンと紐を脇縫目線の所定の位置にとめつける。
- ⑧ 裾の始末

裾のへム代は0.5cmとし、上へ折り上げ、裾から0.3cmのところを0.5cmの間隔で星どめをする。
- (2) ストマッカー
 - ① ギャザー量2倍の3.5cm幅にピンキングカットした飾り布を29m使用し、表布に曲線で装飾的にとめつける。
 - ② 共布で裁断した裏布と縫い合わせる。(写真5)
- (3) ペチコート
 - ① 前ペチコート

前中心布と前脇布との縫い合せ。
縫い代は1.8cmにして脇側へ倒す。

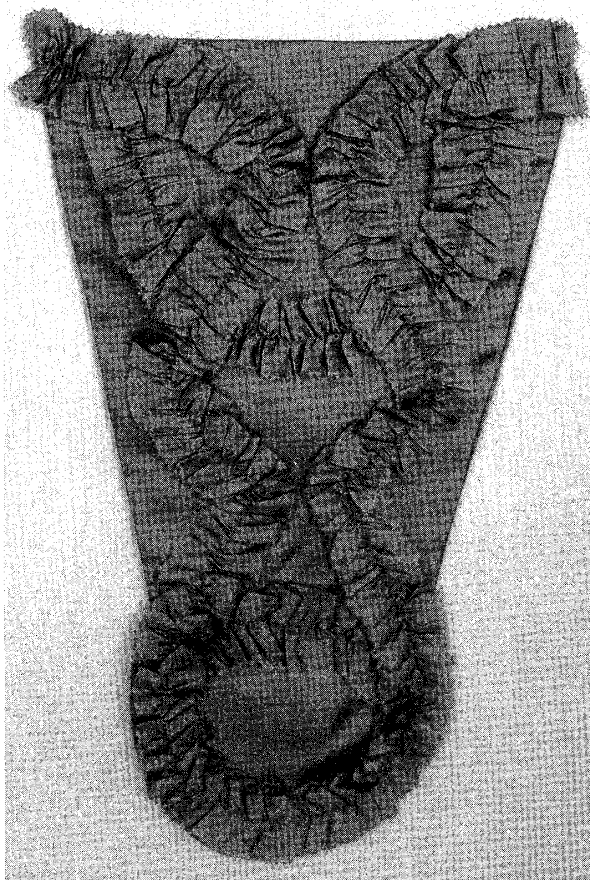


写真 5

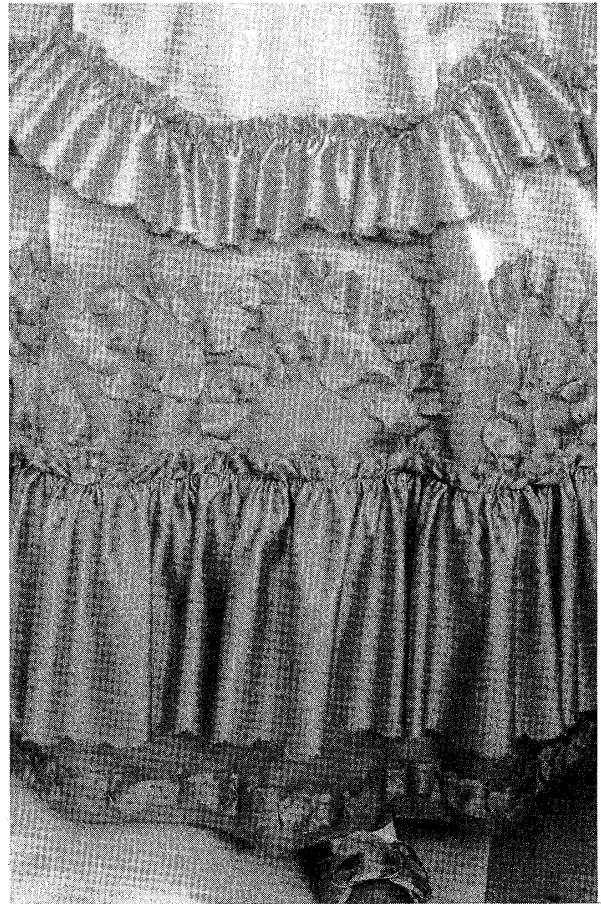


写真 6

- ペチコートと共布の飾り布。

3.5cm幅—4.73m、10cm幅—2 m、23.5cm幅—2.32mを裁断し、10cmと23.5cmの布はギャザーをよせて所定の位置に縫いつける。3.5cm幅の布はところどころタックをとり、所定の位置にとめつける。(写真 6)

- ② 後ペチコート

- 後中心布と後脇布との縫い合せ。

縫代1.8cmにして脇側へ倒す。

- ③ 脇縫

- 前後のペチコートのウエスト部分のプリーツを折りたたみ、後脇縫をする。

縫代は1.8cmとし前側に倒す。

- ④ ペチコートをウエスト位置に安定させるために、2.5cm幅の綿テープ1 mを前後それぞれのウエスト部に縫いつける。

- ⑤ 裾の始末

ヘム代は1.5cmで折り上げ、裾より0.5cmのところを0.5cm間隔で星どめをする。

- (4) 仕上げ

- ① ストマッカーとローブの縫い合せ

山本・吉井・津田：縁飾り、裾飾りのついた 18 世紀のドレス

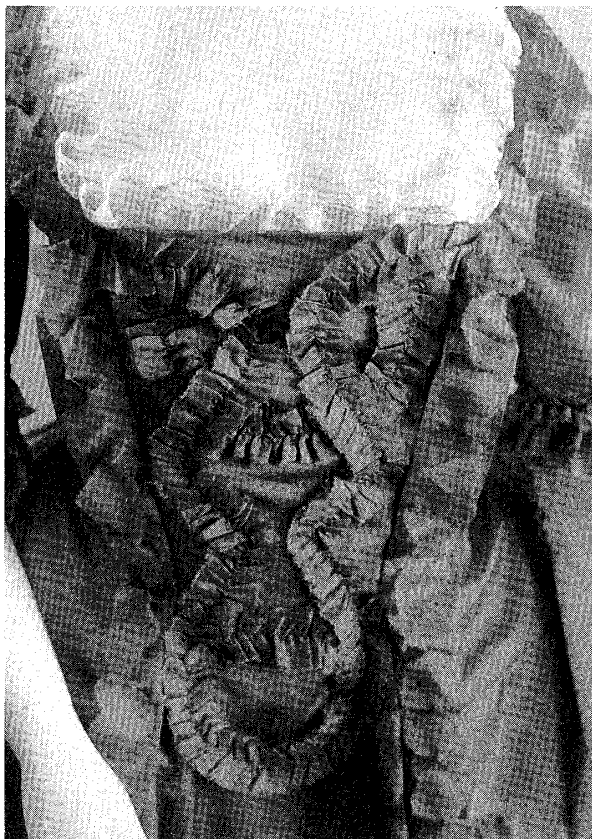


写真 7



写真 8



写真 9

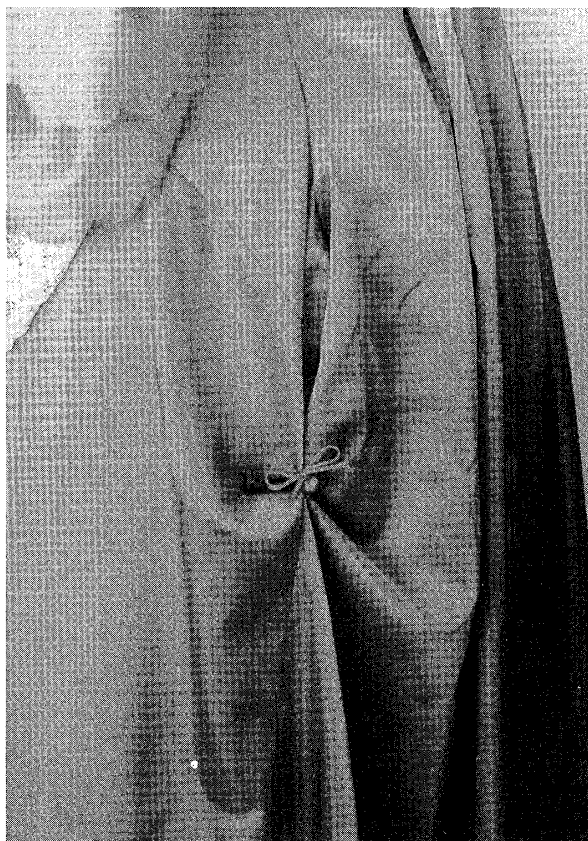


写真10

山本・吉井・津田：縁飾り、裾飾りのついた 18 世紀のドレス

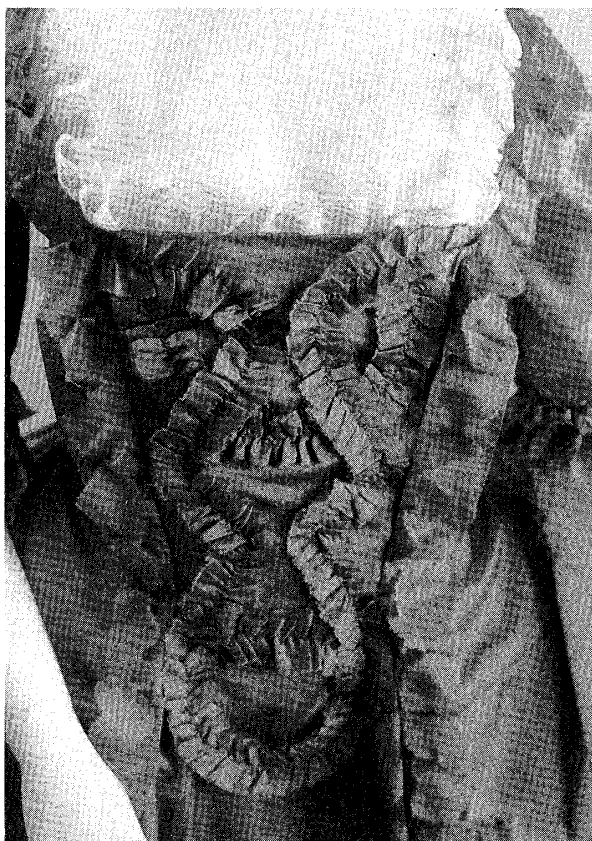


写真 7



写真 8

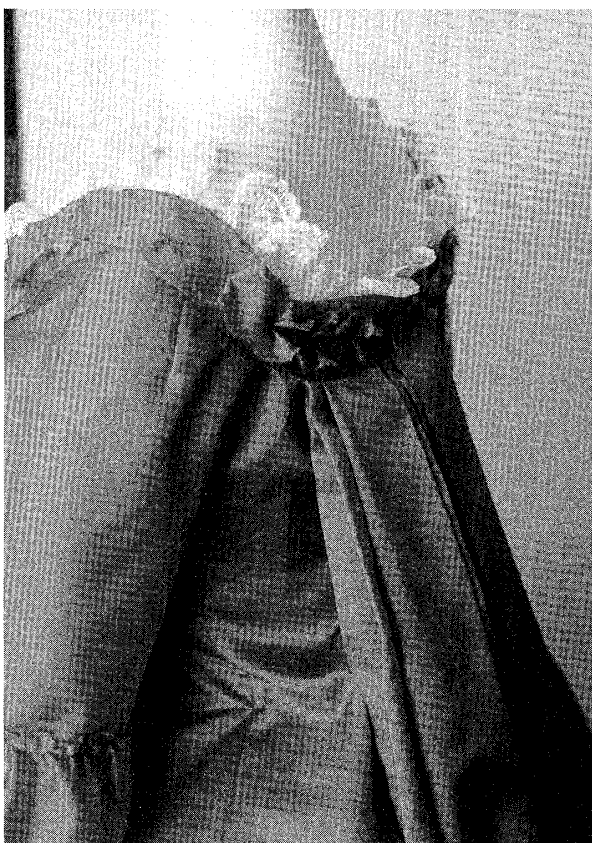


写真 9

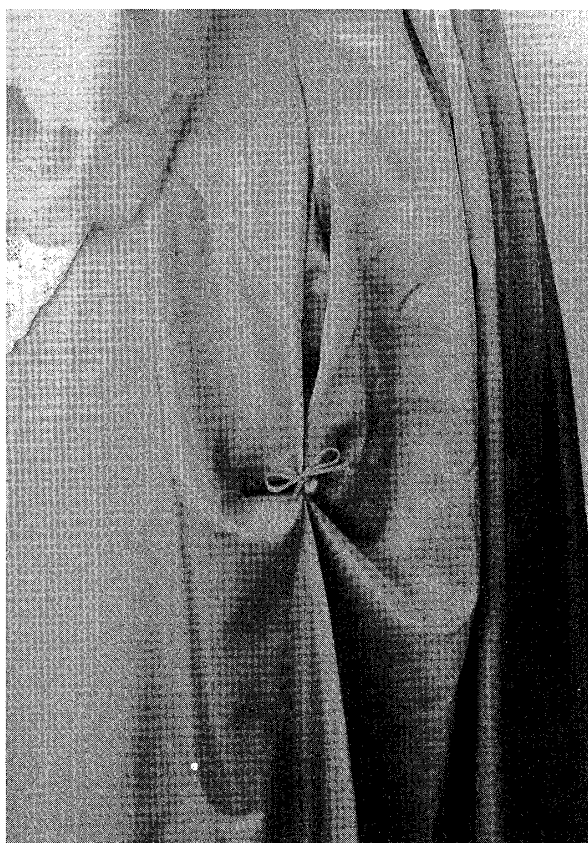


写真10

山本・吉井・津田：縁飾り、裾飾りのついた18世紀のドレス

にして製作した。

○太さ0.4cmのワイヤー2本を1段目周経128cm、2段目周経144cm、3段目周経160cm、4段目周経176cmと16cmずつの差をつけて、前後は平らで横にはり出すような楕円にして、ワイヤーをバイヤス地の布でくるむ。

○1段目15cm横上部64cm下部72cm、2段目縦15cm横上部72cm下部80cm、3段目縦13cm横上部80cm下部88cmの台形の布それぞれ2枚を中表にあわせて脇線を縫い、3段切替えのパニエを作る。

○バイヤス地の布でくるんだワイヤーを3段切り替えのパニエにかがりつけた。(写真11)

(5) ストール

90cm幅のレース地1.2cmを三角形に裁ち、3cm巾、8cm巾、9cm巾のレース合計10mをかざりに使用した。

(6) 帽子

オフホワイトの薄地麻布に4.5cm幅のレースで縁かざりをし、0.5cmのブレード及び2.5cm幅のりボンで装飾した。(りボンは0.5cmのブレードで縁かざりを済ませたものを使用した。)

(7) 靴

市販の靴にベルトとバックルをつけて装飾した。(写真12)

5 結 論

200余年の年月を経た18世紀の宮廷衣裳は残っているが、一般市民の衣裳はほとんど残っていない。高価なものは大事に保存し、作り直して売ること出来たであろうが、一般市民は作り直しが不可能になるまで着古していたのであろう。

今回、この時代の衣裳を複製した結果、次のことが考察された。

- ① 人間の体格は時代、地域、人種、年令とさまざまな条件により異なるため、推測の域を脱しえないが、製作したドレスと多くの展示品から、この時代の女性の身長は一般にそれ程高いとは思えない。このドレスの着用者は出来上り丈130cmから考えると、着装(パニエの張り方)にもよるが、155cm～165cm位と思われた。
- ② 出来上りバスト寸法85cmでバスト位置が高い。
- ③ 出来上りウエスト寸法63cm、出来上りヒップ寸法93cmでコルセットをつけて締めていたにしては思いのほか大きく、現在の標準サイズよりやや大きめである。
- ④ しかし、コルセットをつけ、パニエをはかせて下着をととのえた上にこのコスチュームを着装させると、ウエストはくびれて、スカートの横の広がりと対照的に細く見える。ウエストラインを境に上部は締めつけ、下部は広がり対比によって実際とは違った見え方になるのがわかった。

- ⑤ プロポーションとしては、ウエストの締め方、スカートの横張り、靴が見えるスカート丈は理想的なバランスとは云えないが、部分の装飾がデコラティブで豪華に見える特色がある。
- ⑥ この時代の縫製技術は、実に精巧なもので美しく仕上っており、表には丁寧に飾りをつけたり、細かく刺繍をしたりしているが、裏返すと縫代の始末は裁目のままであり、脇明きなどは着装すればプリーツでかくれるため、始末はせずにそのままにしてあるなど、雑と思われる面もある。しかしこれは、見えるところのみを重視し、見えない部分は軽視する傾向があったのではなく、この時代は仕立て直しがよく普通に行われており、これをほどいて作り直すことが容易に出来るよう、また余分な縫目跡を残さないように考えられていたと思う。それ故、1780年代になって、軽くて安い材料でドレスが製作され、実用化された時には念入りの仕上げになっている。
- ⑦ ストマッカーの左横は、着用してから縫いつけるなど、人手を借りずには着装出来ないこの時代の衣裳は、服の合理性、実用性はあまり考えられていなかった。

以上のことが考察されたが、全般にロココの時代は技巧的で人工的な時代で、自然のもの、現実的なものは少ない虚飾の文化とも云えた。それがこの時代の服飾にもよく表われている。

いつの時代のモードでも、ある期間を経たり、それが極地まで進むと必らずその反動的な方向に向うものである。フランス革命後、人々の精神状態も変化し、ルソーなどの啓蒙思想の影響や、自然への関心も深まり、簡素でかつ、繊細で自由なムードの古典スタイル（エンパイアスタイル）は、必然的に出てきたものと思われる。

ファッションの変革は一つの時代から次の時代へと重なり合いながら、時にはゆっくりと、時には急速に進展するものである。

参考文献

- 三好厚子、「18世紀女性用ドレスの縁かざり」、『DRESSTUDY』、SPRING,1988,VOL 13,18～20ページ。
- J・アンダーソン・ブラック、マッジ・ガーランド（山内沙織訳）『ファッションの歴史』（下）、PARCO出版、1985年
- ヘニー・ハラルド・ハンセン（原口理恵、近藤 等 共訳）『服装の歴史』、文化出版局、1972年
- 井上泰男、匠 秀夫、『衣服の文化史』、研究社出版、1983年
- 京都服飾文化研究財団編『華麗な革命』、1989年